

## 第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

日常はサイレンとともに

北海道 石狩市立石狩中学校 二学年

植田 さくら

約二年前の九月に私は北海道へ来た。新しい家は海にとても近く、目の前の道路は海に真っ直ぐつながっている。その道路は夏をピークに多くの自動車が海に行くために利用している。この家に来てからサイレンの音を聞くことが多くなったのは、緊急車両も海に行くために利用するからだろう。つまり私にとってサイレンの音が聞こえるということは海で事故があったというのと同じ意味を持つ。サイレンの音は、家でイヤホンをしても嫌でも聞こえてきてしまうし、毎日聞いていても慣れることができない音だ。けれども、私がさらにサイレンの音を意識するのは、去年の「海の出来事」があつてからだと思う。

私が引越して来たのは夏の終わりの頃。海開きは終わっていて、道路は静かだった。だから私が初めて北海道で本格的な夏を過ごしたのは次の年からだった。その年は、新型コロナウイルスの影響からか、海開きは行われていない中にもかかわらず、気温の上昇と比例して、海に向かう人が多くなっていくのが分かった。海に行くと、多くの人でにぎわい、海らしい景色が広がっていて、家のまわりの自然のある静かな雰囲気とは打って変わった、活気のある姿が身近にあるというのが少し不思議でうれしかった。しかし夏は、海での事故が多く、特にその年は海で最も恐ろしい事故があつた。その日、私は家においてやはりサイレンが鳴っていた。異常な程に短時間に何回も音が聞こえ、異常を感じた家族は口々に、「何が起こつたの」と口にした。そして、ニュースを見た一人が言った。

「大学生が流された」

それを聞いた時、自分のまわりでそんなことが起こるといふ事実には驚いた。さらに流されたのは自分と十も歳の変わらない人だということもあり、事故の存在をさらに身近に感じ恐怖と不安で胸がいっぱいだった。家族も同じ気持ちなのか、みんな下を向いてしばらく黙っていた。けれど母は海の恐ろしさを真剣にみんなに伝えた。きっと心配性の母は自分の家族に同じことが起こらないか心配でしかたなかったのだと思う。海の近くに住むということはこれから同じような思いを何回もしていくことになるのか、と先が思いやられた。今年も、海開きが行われていて、人の多さは去年の比ではなかった。サイレンの音も同じような状況だった。去年の出来事が思い起こされ、不安な気持ちがあることが多くなった。そんな時、この作文コンクールを知り、生命保険について母に

## 第59回中学生作文コンクール

聞いた。母は生命保険にみんな入っていると聞いた。少し意外だった。母は難しい手続きが苦手な逃げたがるし、なにより母から保険の話がされたことがなかった。けれど一番の感想は安心した気持ちだった。さらに加入した理由を聞くと「北海道に来てからちゃんとしていうことを考えるようになった。」と言う。確かに北海道に来てから、新型コロナウイルスやヒゲマなど、身近に危険を感じる出来事は多くなった。『死と隣合わせ』という言葉がしっくりくる。本当にいつどこでなにかあるか分からないと思う。だから私は、災害の時のように「備え」が必要だと考えた。病気やケガは、震災の津波を止めるように、自分で治すことはできない。例えば、避難所で待機している時も、必要なものを用意するのは難しく、なにもできない場合も多くあると思う。このように私は、できない時のために、できる今に、できることをすることがとても大切だと考えた。

今考えてみると、サイレンは「次はあなたの番かも」と教えてくれているようだった。いつどこでなにかあるか分からない、つまりサイレンはずっと鳴り響いている中で、私達は生きていくということ。だから、「備え」として生命保険にこれからも入り続けていきたい。